



エダ タツキ

江田 達貴

岡山大学に在籍するユニークな学生を紹介するこのコーナー。今回紹介するのは文学部3年生の江田達貴さんです。アマチュアのシンセサイザー奏者としてライブハウスなどで活躍し、先日はいつにCDを発売。岡山音楽界で活躍中の彼に、できたばかりのピオーネ・ユニオンでインタビューしました。

「シンセは自分の意思をもっとも音に反映できるマシン」

シンセサイザーに魅せられたきっかけ

子どもの頃、イギリスのピーター・ガブリエルの音に衝撃を受けました。シンセサイザーでいろんな音を駆使して、かつアフリカのドラムのような民族音楽のリズムをとり入れたすごく

刺激的な作品で、気がついたら電子音が好きになっていました。大学に入ってからアルバイトでお金を貯めて、1年生の冬に念願のシンセサイザーを手に入れました。少しずつ曲を作り始めました。

シンセサイザーの魅力

「自分で音を作る」のがシンセサイザーという楽器の特徴です。電子音って聞くだけで、「ピコピコした音なんかダメだ、機

「いろいろな垣根を越えて活動したい」

現在の活動

今、サークルには入っていません。だけど、サークルの人といろいろ垣根を越えて活動したい、と常に考えています。

シンセで作曲をはじめた冬休み頃、修行をしたいと思ったんです。それで何かに曲を提供するなんてどうかな、と。技術は未熟だけど、何か力になれることはないか、と友達のいる演劇部に売り込みに行ったら、OKしてもらえたんです。それから徐々にお声がかかるようになりました。2年生の

ころの学祭では、最初は効果音だけって話だったんですが、本番の3日前に「テーマ曲を作った」といわれて、1日前に持って行ったら「ちよっと違つ」と(笑)、最終的に出来たのが本番3〜4時間前で、ボツになった曲を客入れ

の時に使ったら、結局そつちの方が評判良かったり(笑)

教育学研究科・岡田和也准教授(ペンネーム・みぎなごみ)とのコラボレーション

岡田先生は、詩人としてすごい実績のある方なんですけど、先生の活動にたまたまボランティアで行ったときに、僕が音楽をやっていると知って色々良しくてくださって、

「今度、何か一緒にやってみましょうか」ということになりました。まだ詳しいことは決まっていないですけど、僕がシンセを弾くのをバックに先生が詩を詠んでいく、という形になるかもしれません。

言語芸術家として、みぎなごみは、江田君の、真摯な視線から展開された、音の楽しさを表現することを色々の人が考えてみる契機になるような活動を期待しています。
僕は、言葉に声にする楽しさを伝えたい。

「結局、人と人との繋がりを生むのは自分の動き次第だっと思ってますね」

地方で活動すること

情報量は、今はネットでいくらでも調べたりできるので、あ



んまり岡山に住んでいるから不便っていうことはないですね。その気になればネットに曲を発表して腕を磨いていく機会もありますし。

岡大のいいところ

これだけの敷地があるし、いろんな人がいる。自分でどんどん動き回っていればいろんな面白い人と出会えるんじゃないかって思います。

だから結局、人と人との繋がりを生むのは、自分の動き次第だっと思ってますね。